

I am a Cat – Chapter 3b (Natsume Sōseki)

はなこ 鼻子はようやく なたとく 納得してそろそろ しつもん ていしゅつ 質問を呈出する。いっときあらだ ことばづか 言葉使いも めいてい たい 迷亭に対してはまたもとのごとく ていねい になる。「かんげつ 寒月さんも りがくし 理学士ですが、ぜんたい 全体どんな こと せんもん 事に専門にしているのをごさいます」「だいがくいん 大学院では ちきゅう 地球の じき けんきゅう 磁気の研究をやっています」と しゅじん 主人が まじめ こと ぶこう 不幸にしてその意味が 鼻子には ぶんらん ものだから「へえー」とは云ったが けげん かお 怪訝な顔をしている。「それを べんきょう 勉強すると ほんし 博士になれましようか」と聞く。「ほんし 博士にならなければ やれないとおっしゃるんですか」と しゅじん 主人は ぶゆかい 不愉快そうに ます 尋ねる。「ええ。ただの げくし 学士じゃね、いくらでもありますからね」と 鼻子は へいき 平気で答える。しゅじん 主人は 迷亭を見て いろいろ やな顔をする。「ほんし 博士になるかならんかは ぼくら 僕等も ほうしょう 保証する事が 出来んから、ほかの事を聞いていただく事にしよう」と 迷亭もあまり 好きげん 好い機嫌ではない。「ちかごろ 近頃でもその地球の——何かを勉強しているのをごさいますようか」「にさんちまえ 二三日前は 首縊りの 力学と云う 研究の結果を 理学協会 で せんぜつ 演説しました」と しゅじん 主人は何の気も つかず 付かずに云う。「おやいやだ、首縊りだなんて、よっぽど へんじん 変人ですねえ。そんな首縊りや何かやっていたんじゃ、とても ほんし 博士には なれますまいね」「ほんしん 本人が首を縊っちゃあむずかしいですが、首縊りの力学なら 成れないとも 限らんです」「そうでしょうか」と 今度は しゅじん 主人の方を見て 顔色を 窺う。悲しい事に 力学と云う意味が わからんので 落ちつきかねている。しかしこれしきの事を 尋ねては かねだぶじん 金田夫人の 面目に 関すると思つてか、ただ あいて 相手の顔色で 八卦を立てて見る。しゅじん 主人の顔は 渋い。「そのほかになにか、わり易いものを勉強しておりますまいか」「そうですな、せんだって どんぐり 団栗のスタビリチーを 論じて 併せて 天体の 運行に 及ぶと云う 論文を書いた事があります」「どんぐり 団栗なんぞでも だいがっこう 大学校で勉強するものでしょうか」「さあ ぼく 僕も 素人だからよく 分らんが、何しろ、寒月君がやるくらい なんだから、研究する 価値があると 見えますな」と 迷亭は すまして 冷かす。

はなこ 鼻子は 学問上 の 質問は 手に 合わんと 断念したものと 見えて、 今度は 話題を 転ずる。「御話は違いますが——この 御正月に 椎茸を 食べて 前歯を 二枚折った そうじゃ ございせんか」「ええ その 欠けた ところに 空也餅が ぐっ付いて いますね」と 迷亭はこの 質問こそ 吾繩張内だと 急に 浮かれ出す。「色気のない人 じゃ ございせんか、何だって 楊子を使わないでしょう」「今度逢ったら 注意しておきましょう」と しゅじん 主人が ぐすくす 笑う。「椎茸で歯が かけるくらい じゃ、よほど 歯の 性が 悪いと思われ ますが、如何なもの でしょう」「善いとは 言われ

ますまいな——ねえ迷亭」「善い事はないがちょっと愛嬌があるよ。あれぎり、まだ填めないところが妙だ。今だに空也餅引掛所になってるなあ奇観だぜ」「歯を填める小遣がないので欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくんでしょうか」「何もながまえばかけなりなのわけでもないのでしょうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございますならちょっと拝見したいものでございますが」「端書なら沢山あります、御覧なさい」と主人は書齋から三四十枚持って来る。「そんなに沢山拝見しないでも——その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを撰ってやろう」と迷亭先生は「これなぞ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あらいやだ、狸だよ。何だって撰りに撰って狸なんぞかくんでしょうね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句をよ読んで御覧なさい」と主人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。

「旧暦の歳の夜、山の狸が園遊会をやって盛に舞踏します。その歌に曰く、来いさ、としの夜で、御山婦美も来まいぞ。スッポコポンノポン」「何ですこりや、人を馬鹿にしているじゃございませんか」と鼻子は不平の体である。「この天女は御気に入りませんか」と迷亭がまた一枚出す。見ると天女が羽衣を着て琵琶を弾いている。

「この天女の鼻が少し小さ過ぎるようですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句をよ読んで御覧なさい」文句にはこうある。「昔しある所に一人の天文学者がありました。ある夜いつものように高い台に登って、一心に星を見ていると、空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出したので、天文学者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れてしまいました。朝見るとその天文学者の死骸に霜が真白に降っていました。これはほんとうの嘸だと、あのうそつきの爺やが申しました」「何の事ですこりや、意味も何もないじゃありませんか、これでも理学士で通るんですかね。ちっと文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですがねえ」と寒月君さんさんにやられる。迷亭は面白半分「こりやどうです」と三枚目を出す。今度は活版で帆懸舟が印刷してあって、例のごとくその下に何か書き散らしてある。「よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯の千鳥、さよの寝覚の千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるじゃありませんか」「話せます

だった。シモニジスは八十で妙詩を作った。おれだって……」「馬鹿馬鹿しいわ、あなたの
ような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算して
いる。「失敬な、——甘木さんへ行って聞いて見ろ——元来御前がこんな皺苦茶な黒木綿の
羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭
の着ているような奴を着るから出しておけ」「出しておけて、あんな立派な御召はござんせ
んわ。金田の奥さんが迷亭さんに叮嚀なになったのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。
着物の咎じゃございませぬ」と細君うまく責任を逃がれる。

主人は伯父さんと云う言葉を聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、
今日始めて聞いた。今までついに噂をした事がないじゃないか、本当にあるのかい」と迷亭
に聞く。迷亭は待ってたと云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬鹿に頑物でねえ
——やはりその十九世紀から連綿と今日まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半々
に見る。「オホホホホ面白い事ばかりおっしゃって、どこに生きていらっしゃるんです」
「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじゃ無いです。頭にちよん髷を頂いて生
きてるんだから恐縮しまさあ。帽子を被れてえと、おれはこの年になるが、まだ帽子を
被るほど寒さを感じた事はないと威張ってるんです——寒いから、もっと寝ていらっしゃいと
云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時間以上寝るのは贅沢の沙汰だって朝暗いうちか
ら起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには、永年修業をしたも
んだ、若いうちはどうしても眠たくていかなんだが、近頃に至って始めて随处任意の庶境
に入ってはなはだ嬉しいと自慢するんです。六十七になって寝られなくなるなあ当り前でさ
あ。修業も糸瓜も入ったものじゃないのに当人は全く克己の力で成功したと思ってるんで
すからね。それで外出する時には、きっと鉄扇をもって出るんですがね」「なににするんだ
い」「何にするんだか分からない、ただ持って出るんだね。まあステッキの代りくらいに考え
てるかも知れんよ。ところがせんだって妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しか
ける。「へえー」と細君が差し合のない返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高
帽子とフロックコートに至急送れと云うんです。ちょっと驚ろいたから、郵便で問い返した
ところが老人自身が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で祝捷会があるからそれ
までに間に合うように、至急調達しろと云う命令なんです。

ところがおかしいのは命令中めいれいじゅうにこうあるんです。帽子は好い加減ぼうし い かげん おおな大きさのを買ってくれ、
洋服ようふく すんぼう みはかも寸法だいまる ちゅうもんを見計らって大丸ちかごろへ注文したしてくれ……」 「近頃は大丸でも洋服を仕立てるのか
い」 「なあに、先生せんせい、白木屋しろきやと間違えたんだあね」 「寸法を見計ってくれたって無理むりじゃない
か」 「そこが伯父おじの伯父たるところさ」 「どうした？」 「仕方がないから見計らって送おくってや
った」 「君きみも乱暴らんぼうだな。それで間に合ったのかい」 「まあ、どうにか、こうにかおっついたん
だろう。国の新聞くに しんぶんを見たら、当日とうじつ牧山翁まきやまおうは珍めづらしくフロックコートにて、例れいの鉄扇てっせんを持ち
……」 「鉄扇てつせんだけは離はなさなかつたと見えるね」 「うん死んだら棺くわんの中なかへ鉄扇てつせんだけは入れてや
ろうと思っているよ」 「それでも帽子も洋服も、うまい具合ぐあいに着きられて善よかった」 「ところが
大間違おおまちがい。僕ぼくも無事ぶじに行いってありがたいと思おもっていると、しばらくして国くにから小包こづつみが届とどいたか
ら、何か礼れいでもくれた事ことと思おもって開あけて見みたら例れいの山高帽子やまたかぼうしさ、手紙てがみが添そえてあつてね、せ
っかく御求おんもとめ被下くだされ候そうらえども少しょう々しょう大そきく候あいだ間ぼうしや、帽子屋おんつかへ御遣うえわしの上おんちぢ、御縮おんちぢめ
被下くだされ度たく候そ。縮め賃ちぢは小為替ちんにて此方こがわより御送こなた可おん申おくり上もう候しあとあるのさ」 「なるほど迂濶うかつだ
な」と主人しゅじんは己おのれより迂濶てんかなもの天下てんかにある事はっけんを發見おおいして大まんぞくに満足ていの体ていに見える。やが
て「それから、どうした」と聞きく。「どうするつたって仕方がないから僕ちやうだいが頂戴かぶして被かぶって
いらあ」 「あの帽子わらかあ」と主人わらがにやにや笑わらう。「その方かたが男爵だんしゃくでいらっしゃるんです
か」と細君さいくんが不思議ふしぎそうに尋たずねる。「誰だれがです」 「その鉄扇てつせんの伯父おじさまが」 「なあに漢学者かんがくしゃ
でさあ、若い時わか聖堂ときせいどうで朱子学しゅしがくか、何かかたにこり固かたまったものだから、電氣灯でんきとうの下したで恭うやうやしくち
よん鬚まげを頂いただいているんです。仕方がありません」とやたらに顛あごを撫なで廻まわす。「それでも君
は、さっきの女おんなに牧山男爵いと云いったようだぜ」 「そうおっしゃいましたよ、私わたしも茶ちゃの間まで聞
いておりました」と細君さいくんもこれだけは主人いけんの意見どういに同意どういする。「そうでしたかなアハハハハ
ハ」と迷亭めいていは訳わけもなく笑わらう。「そりゃ嘘うそですよ。僕うそに男爵うその伯父いがありや、今頃いまごろは局きよくちやう長ちやう
らいになつていまさあ」と平氣へいきなものである。

「何なんだか変へんだと思おもった」と主人しゅじんは嬉うれしそうな、心しん配ぱいそうな顔かお付つきをする。「あらまあ、よく
真面目まじめであんな嘘うそが付つけますねえ。あなたもよっぽど法螺ほらが御上手おじょうずでいらっしゃる事こと」と細君さいくん
は非常ひじょうに感心かんしんする。「僕ぼくより、あの女おんなの方が上ほう手うでさあ」 「あなただつて御負おまけなさる
氣遣きづかいはありません」 「しかし奥おくさん、僕の法螺たんは単たんなる法螺たんですよ。あの女おんなのは、みんな
魂胆こんたんがあつて、曰いわく付つきの嘘うそですぜ。たちが悪いわるです。猿智慧ざるぢえから割わり出だした術数じゅつすうと、

てんらい こっけいしゆみ こんどう かみさま かつがん し たん え わけ
天来の滑稽趣味と混同されちゃ、コメディの神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳
に立ち至りますからな」主人は俯目になって「どうだか」と云う。妻君は笑いながら「同じ事
ですわ」と云う。

わがはい いま むこ よこちょう あし ふ こ こと かどやしき かねだ かま み
吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷の金田とは、どんな構えか見た
事は無論ない。聞いた事さえ今が初めてである。主人の家で実業家が話頭に上った事は一反
もないので、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ
冷淡であった。しかるに先刻凶らずも鼻子の訪問を受けて、余所ながらその談話を拝聴
し、その令嬢の艶美を想像し、またその富貴、権勢を思い浮べて見ると、猫ながら安閑と
して椽側に寝転んでいられなくなった。しかのみならず吾輩は寒月君に対してはなはだ
同情の至りに堪えん。先方では博士の奥さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院
まで買収して知らぬ間に、前歯の欠けたのさえ探偵しているのに、寒月君の方ではただニヤ
ニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能が
なさ過ぎる。と言って、ああ云う偉大な鼻を顔の中に安置している女の事だから、滅多な者で
は寄り付ける訳の者ではない。こう云う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに
ぜに
銭がなさ過ぎる。

めいてい ぜに ふじゆう ぐうぜんどうじ かんげつ たす あた べんぎ すくな
迷亭は銭に不自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを与える便宜は尠かる
う。して見ると可哀相なのは首縊りの力学を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発し
て、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫だ
けれど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の家に寄寓する猫で、世間
一般の痴猫、愚猫とは少しく撰を殊にしている。この冒険をあえてするくらいの義侠心は
もとより尻尾の先に畳み込んである。何も寒月君に恩になったと云う訳もないが、これはただ
に個人のためにする血気躁狂の沙汰ではない。大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意
を現実にする天晴な美拳だ。人の許諾を経ずして吾妻橋事件などを至る処に振り廻らす
以上は、人の軒下に犬を忍ばして、その報道を得々として逢う人に吹聴する以上は、
しゃふ ばてい ぶらいかん しょせい ひやといばばあ さんば ようば あんま とんま しょう
車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至るまでを使用し
て国家有用の材に煩を及ぼして顧みざる以上は——猫にも覚悟がある。幸い天気も好い、
しもどけ しょうしょうへいこう みち いちめい あし うら だろ つ えんがわ うめ
霜解は少々閉口するが道のためには一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、椽側へ梅の

花の印を押すくらいな事は、ただ御三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申されな
い。翌日とも云わずこれから出掛けようと勇猛精進の大決心を起して台所まで飛んで出
たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達しているのみならず、脳の
発達においてはあえて中学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しいかな咽喉の構造だ
けはどこまでも猫なので人間の言語が饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充
敵の情勢を見届けたところで、肝心の寒月君に教えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先
生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受けて光らぬと同じ事で、せつ
かくの智識も無用の長物となる。これは愚だ、やめようかしらんと上り口で佇んで見た。

しかし一度思い立った事を途中でやめるのは、白雨が来るかと待っている時黒雲共隣国へ
通り過ぎたように、何となく残り惜しい。それも非がこっちにあれば格別だが、いわゆる
正義のため、人道のためなら、たとい無駄死をやるまでも進むのが、義務を知る男児の本懐
であろう。無駄骨を折り、無駄足を汚すくらいは猫として適当のところである。猫と生れた
因果で寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技倆はないが、
猫だけに忍びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を成就するのはそれ自身にお
いて愉快である。吾一箇でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告
げられんでも人に知られているなど云う自覚を彼等に与うだけが愉快である。こんなに愉快
が続々出て来ては行かずにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横丁へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顔に占領している。この
主人もこの西洋館のごとく傲慢に構えているんだろうと、門を這入ってその建築を眺めて見
たがただ人を威圧しようと、二階作りが無意味に突っ立っているほかに何等の能もない構造で
あった。迷亭のいわゆる月並とはこれであろうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜け
て、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生の台所の十倍はたしかにある。せん
だって日本新聞に詳しく書いてあった大隈伯の勝手にも劣るまいと思うくらい整然とぴか
ぴかしている。「模範勝手だな」と這入り込む。見ると漆喰で叩き上げた二坪ほどの土間
に、例の車屋の神さんが立ちながら、御飯焚きと車夫を相手にしきりに何か弁じている。こ
いつは剣呑だと水桶の裏へかくれる。

「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚が云う。「知らねえ事があるもんか、この界限で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」これは抱え車夫の声である。「なんとも云えないよ。あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らない変人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知ってりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供の歳さえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐変木だ。構あ事あねえ、みんなで威嚇かしてやろうじゃねえか」「それが好いよ。奥様の鼻が大きい過ぎるの、顔が気に喰わんのって——そりゃあ酷い事を云うんだよ。自分の面あ今戸焼の狸見たような癖に——あれで一人前だと思っているんだからやれ切れないじゃないか」「顔ばかりじゃない、手拭を掲げて湯に行くところからして、いやに高慢ちきじゃないか。自分くらいえらい者は無いつもりでいるんだよ」と苦沙弥先生は飯焚にも大に不人望である。「何でも大勢であいつの垣根の傍へ行って悪口をさんざんいってやるんだね」「そうしたらきつと恐れ入るよ」「しかしこっちの姿を見せちゃあ面白くねえから、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれって、さっき奥様が言い付けておいでなすったぜ」「そりゃ分っているよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受けると云う意味を示す。なるほどこの手合が苦沙弥先生を冷やかしに来るなど三人の横を、そっと通り抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いても不器用な音のした試しがない。空を踏むがごとく、雲を行くがごとく、水中に磬を打つがごとく、洞裏に瑟を鼓するがごとく、醍醐の妙味を嘗めて言詮のほかに冷暖を自知するがごとし。月並な西洋館もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、権助も、飯焚も、御嬢さまも、仲働きも、鼻子夫人も、夫人の旦那さまもない。行きたいところへ行って聞きたい話を聞いて、舌を出し尻尾を掉って、髭をぴんと立てて悠々と帰るのみである。ことに吾輩はこの道に掛けては日本一の堪能である。草双紙にある猫又の血脈を受けておりはせぬかと自ら疑うくらいである。藁の額には夜光の明珠があると云うが、吾輩の尻尾には神祇釈教恋無常は無論の事、満天下の人間を馬鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである。金田家の廊下を人の知らぬ間に横行するくらいは、仁王様が心太を踏み潰すよりも容易である。この時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、これも普段大事にする尻尾の御蔭だなどと気が付いて見るとただ置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝してニャン運長久を祈らばやと、ちょっと低頭して見た

が、どうも少し見当が違ちがうようである。なるべく尻尾の方ほうを見て三さん挿さんしなければならん。尻尾の方を見ようと身体からだを廻まわすと尻尾も自然しぜんと廻まわる。追付おつつこうと思おもって首くびをねじると、尻尾も同じ間かん隔かくをとって、先さきへ馳かけ出す。なるほど天地玄黄てんちげんこうを三寸裏さんずんりに収おさめるほどの霊物れいもつだけあつて、到底とうてい吾輩わがの手てに合あわない、尻尾めぐを環めぐる事七度ななたび半はんにして草臥くたびれたからやめにした。少しょう女じょう眼めがくらむ。どこにいるのだからちょっと方角ほうかくが分わからなくなる。構かまうものか滅茶苦茶めちゃくちやにあるき廻まわる。障子しょうじの裏うらで鼻子こえの聲こゑがする。ここだと立ち留とどまって、左右さゆうの耳みみをはすに切きつて、息いきを凝こらす。「貧乏びんぼう教師きょうしの癖くせに生意気なまいきじゃありませんか」と例れいの金切りかなぎ声こゑを振ふり立てる。

「うん、生意気なまいきな奴やつだ、ちと懲こらしめのためにいじめてやろう。あの学校がっこうにや国くにのものもいるからな」「誰だれがいるの?」「津木つぎピン助すけや福地ふくちキシヤゴがいるから、頼たのんでからかわしてやろう」吾輩わがは金田君かねだくんの生国しょうごくは分わからんが、妙みょうな名前なまえの人間にんげんばかり揃そろった所ところだと少しょう女じょう驚おどろいた。金田君かねだくんはなお語ごをついで、「あいつは英語えいごの教師きょうしかい」と聞きく。「はあ、車屋くるまやの神かみさんの話はなしでは英語えいごのリードなルか何か専せん門もんに教おしえるんだって云いいます」「どうせ碌ろくな教師きょうしじゃあるめえ」あるめえにも尠すくなからず感心かんしんした。「この間あいだピン助あに遇あったら、私わたしの学校がっこうにや妙な奴やつがおります。生徒せいとから先生せんせい番茶ばんちやは英語えいごで何なにと云いいますと聞きかれて、番茶ばんちやはSavage teaであると真面目まじめに答こたえたんで、教員きょういん間の物笑ものわらいとなっています、どうもあんな教員きょういんがあるから、ほかのもの、迷惑めいわくになって困こまりますと云いったが、大方おおかたあいつの事ことだぜ」「あいつに極きまっていまさあ、そんな事を云いうような面構つらえですよ、いやに髭ひげなんか生はやして」「怪けしからん奴やつだ」髭ひげを生はやして怪けしからなければ猫ねこなどは一疋いっぴきだって怪けしかりようがない。「それにあの迷亭めいていとか、へべれけとか云いう奴やつは、まあ何なんてえ、頓狂とんきやうな跳返はねかえりなんでしょう、伯父おじの牧山まきやま男爵だんしゃくだなんて、あんな顔かおに男爵おの伯父おなんざ、有あるはずがないと思おもったんですもの」「御前おまえがどこの馬うまの骨ほねだか分わからんもの言う事ことを真まに受うけるのも悪わるい」「悪わるいって、あんまり人ひとを馬鹿ばかにし過ぎるじゃありませんか」と大變殘念たいへんざんねんそうである。不思議ふしぎな事ことには寒月かんげつ君くんの事ことは一言半句いちごんはんくも出でない。吾輩わがの忍しのんで来くる前まえに評判記ひやうばんきはすんだものか、またはすでに落第らくだいと事ことが極きまって念頭ねんとうにないものか、その辺へんは懸念けねんもあるが仕方しかたがない。しばらく佇たたずんでいると廊下ろうかを隔へだてて向むかうの座敷ざしきでベルの音おとがする。そらあすこにも何か事ことがある。後おくれぬ先さきに、とその方角ほうかくへ歩むを向むける。

来て見ると女が独りで何か大声で話している。その声が鼻とよく似ているところをもって推すと、これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂入水をあえてせしめたる代物だろう。惜哉障子越しで玉の御姿を拝する事が出来ない。従って顔の真中に大きな鼻を祭り込んであるか、どうだか受合えない。しかし談話の模様から鼻息の荒いところなどを総合して考えて見ると、満更人の注意を惹かぬ獅鼻とも思われぬ。女はしきりに喋舌っているが相手の声が少しも聞えないのは、噂にきく電話というものである。――「御前は和かい。明日ね、行くんだからね、鶉の三を取っておいておくれ、いいかえ――分ったかい――なに分からない？ おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。――なんだって、――取れない？ 取れないはずはない、とるんだよ――へへへへへ御冗談をだって――何が御冗談なんだよ――いやに人をおひやらかすよ。全体御前は誰だい。長吉だ？ 長吉なんぞじゃ訳が分からない。お神さんに電話口へ出ろって御云いな――なに？ 私しで何でも弁じます？――お前は失敬だよ。妾しを誰だか知ってるのかい。金田だよ。――へへへへへ善く存じておりますだ。ほんとに馬鹿だよこの人あ。――金田だ。――なに？――毎度御最真にあずかりましてありがとうございます？――何がありがたいんだね。御礼なんか聞きたかあないやね――おやまた笑ってるよ。お前はよっぽど愚物だね。――仰せの通りだ。――あんまり人を馬鹿にすると電話を切ってしまうよ。いいのかい。困らないのかよ――黙ってちゃ分からないじゃないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方から切ったものか何の返事もないらしい。令嬢は癩癩を起してやけにベルをジャラジャラと廻す。足元で狎が驚ろいて急に吠え出す。これは迂濶に出来ない、急に飛び下りて椽の下へもぐり込む。

折柄廊下を近く足音がして障子を開ける音がする。誰か来たかと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらっしゃいます」と小間使らしい声がある。「知らないよ」と令嬢は剣突を食わせる。「ちょっと用があるから嬢を呼んで来いとおっしゃいました」「うるさいね、知らないでば」と令嬢は第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さんの事で御用があるんだそうでございます」と小間使は気を利かして機嫌を直そうとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ――大嫌いだわ、糸瓜が戸迷いをしたような顔をして」第三の剣突は、憐れなる寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ束髪に結ったの」小間使はほっと一息ついて「今日」となるべく単簡な挨拶をする。「生意気だねえ、小間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食わす。「そして新しい半襟を掛けたじゃないか」「へ

え、せんだって御嬢様からいただきましたので、結構過ぎて勿体ないと思っ
て行李の中へしまっておきましたが、今までのがあまり汚れましたからかけ
易えました」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「この御正月、
白木屋へいらっしゃいまして、御求め遊ばしたので——鶯茶へ相撲の番
附を染め出したのでございます。妾しには地味過ぎていやだから御前
に上げようとおっしゃった、あれでございませう」「あらいやだ。善く似
合うのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒めたんじゃない。にく
らしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合うものをなぜだまって貰
ったんだい」「へえ」「御前にさえ、そのくらい似合うなら、妾しに
だっておかしい事はないだろうじゃないか」「きっとよく御似合い遊
ばします」「似あうのが分てる癖になぜ黙っているんだい。そうしてす
まして掛けているんだよ、人の悪い」剣突は留めどもなく連発され
る。このさき、事局はどう発展するかと謹聴している時、向うの座敷
で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむ
を得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狎が顔の
中心に眼と口を引き集めたような面をして付いて行く。吾輩は例の忍
び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はま
ず十二分の成績である。

帰って見ると、綺麗な家から急に汚ない所へ移ったので、何だか日当
りの善い山の上から薄黒い洞窟の中へ入り込んだような心持がする。探
険中は、ほかの事に気を奪われて部屋の装飾、襖、障子の具合などには
眼も留らなかったが、わが住居の下等なるを感ずると同時に彼のいわ
ゆる月並が恋しくなる。教師よりもやはり実業家がえらいように思
われる。吾輩も少し変だと思っ、例の尻尾に伺いを立てて見たら、
その通りその通りと尻尾の先から御託宣があった。座敷へ這入って
見ると驚いたのは迷亭先生まだ帰らない、巻煙草の吸い殻を蜂の巣
のごとく火鉢の中へ突き立てて、大胡坐で何か話し立てている。いつ
の間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をして天井の雨洩を余念も
なく眺めている。あいかわらず太平の逸民の会合である。

「寒月君、君の事を譚語にまで言った婦人の名は、当時秘密であつた
ようだが、もう話しても善かろう」と迷亭がからかい出す。「御話しを
しても、私だけに関する事なら差支えないんですが、先方の迷惑にな
る事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに〇〇博士夫人に約束を
してしまったもんですから」「他言をしないと云う約束かね」「ええ」と
寒月君は例のごとく

はおり ひも ばいひん むらさきいろ いろ てんぼう
羽織の紐をひねくる。その紐は売品にあるまじき紫色である。「その紐の色は、ちと天保
ちょう ね かねだじけん むとんじゃく とうてい
調だな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などには無頓着である。「そうさ、到底
にちろせんそうじだい じんがさ たちあおい もん つ さ ばおり つか
日露戦争時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の付いたぶっ割き羽織でも着なくっちゃ
おさ つ おだのぶなが むこいり あたま かみ ちゃせん い
納まりの付かない紐だ。織田信長が聳入をするとき頭の髪を茶筌に結ったと云うがその節
もち 用いたのは、たしかそんな紐だよ」と迷亭もんく なが じっさい じじい
長州征伐の時に用いたのです」と寒月君は真面目である。

「もういい加減に博物館へでも献納してはどうだ。首縊りの力学の演者、理学士水島寒月
くん う のこ はたもと い たち たいめん かん わけ
君ともあろうものが、売れ残りの旗本のような出で立をするのはちと体面に関する訳だか
ら」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云ってくれる人も
ごちゆうこく とお いた ひも たいへん に あ い ひと
ありますので——」「誰だい、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら
おお こえ だ ござん かた
大きな声を出す。「それは御存じの方なんじゃないんで——」「御存じでなくてもいいや、
いったい さ にょしょう ちゃじん あ み
一体誰だい」「去る女性なんです」「ハハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やは
すみだがわ そこ きみ な よ おんな はおり き いっぺんおだぶつ き こ
り隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返御駄仏を極め込
じゃどうだい」と迷亭が横合から飛び出す。「へへへへへもう水底から呼んではおりませ
ん。ここからいぬい ほうがく しょうじょう せかい
乾の方角にあたる清浄な世界で……」「あんまり清浄でもなさそうだ、
どくどく はな ふしん かお むこ よちよう
毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさっき押しかけて
きたんだよ、ここへ、じつ ぼくらふたり おどろ くしゃみ
実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人は寝ながら
ちゃ の しんあい くおん ごぼどうさま かねだ
茶を飲む。「鼻って誰の事です」「君の親愛なる久遠の女性の御母堂様だ」「へえー」「金田
さい き き まじめ せつめい うれ
の妻という女が君の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがる
は しょうす うかが べつだん れい とお しず ちょうし
か、恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺って見ると別段の事も無い。例の通り静かな調子
で「どうか私に、わたし むすめ もら いらい むらさき
あの娘を貰ってくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひね
くる。「ところがおおちが くだい いだい しょうゆぬし なか
大違ひさ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主でね……」迷亭が半
い か ぼく はいたいし かんが
ば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさっきから、あの鼻について俳体詩を考
き たけ つ
えているんだがね」と木に竹を接いだような事を云う。

となり へや さいくん わら だ ずいぶんきみ のんき でき すこ
隣の室で妻君がくすくす笑い出す。「随分君も呑気だなあ出来たのかい」「少し出来た。
だいいく かお はなまつ い つぎ みきぞな
第一句がこの顔に鼻祭りと云うのだ」「それから？」「次がこの鼻に神酒供えというのさ」
「次の句は？」「まだそれぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑

う。「次へ穴二つ幽かなりと付けちゃどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒月が「奥深く
毛も見えずはいけますまいか」と各々出鱈目を並べていると、垣根に近く、往来で「今戸焼
の狸 今戸焼の狸」と四五人わいわい云う声がある。主人も迷亭もちょっと驚ろいて表の方
を、垣の隙からすかして見ると「ワハハハハハ」と笑う声が出て遠くへ散る足の音がする。

「今戸焼の狸というな何だい」と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が
答える。「なかなか振っていますな」と寒月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか
急に立ち上って「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございませ
から、その一斑を披瀝して、御両君の清聴を煩わしたいと思います」と演舌の真似をや
る。主人はあまりの突然にぼんやりして無言のまま迷亭を見ている。寒月は「是非承りた
いものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。
第一の不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つでたくさんである。何もこん
なに横風に真中から突き出して見る必用がないのである。ところがどうしてだんだん御覧の
ごとく斯様にせり出して参ったか」と自分の鼻を掴んで見せる。「あんまりせり出してもおら
んじゃないか」と主人は御世辞のないところを云う。「とにかく引込んではおられませんから
な。ただ二個の孔が併んでいる状態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも知られま
せんから、予め御注意をしておきます。——で愚見によりますと鼻の発達は何れ人間が
鼻汁をかむと申す微細なる行為の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したもの
でございます」「佯りのない愚見だ」とまた主人が寸評を挿入する。

「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻を掴みます、鼻を掴んで、ことにこの局部だけに刺激
を与えますと、進化論の大原則によって、この局部はこの刺激に応ずるがため他に比例して
不相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に硬くなります。ついに凝って
骨となります」「それは少し——そう自由に肉が骨に一足飛に変化は出来ますまい」と
理学士だけあって寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳べ続ける。「いや御不審
はごもつともですが論より証拠この通り骨があるから仕方ありません。すでに骨が出来る。
骨は出来ても鼻汁は出ますな。出ればかまずにはいられません。この作用で骨の左右が削り取
られて細い高い隆起と変化して参ります——実に恐ろしい作用です。点滴の石を穿つがご
とく、賓頭顱の頭が自から光明を放つがごとく、不思議薰不思議臭の喩のごとく、斯様

はなすじ とお
に鼻筋が通って堅くなります」 「それでも君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」 「演者自身の局部は
かいご おそ
回護の恐れがありますから、わざと論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごとき
いだい てんか ちんびん ごりょうくん しょうかい おも
は、もっとも発達せるもっとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思
います」 寒月君は思わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達しますと偉観には相違ござ
いませぬが何となくおそろしくて近づき難いものであります。あの鼻梁などは素晴らしいには違
いませぬが、少々峻嶮過ぎるかと思われませぬ。古人のうちにててもソクラテス、ゴール
ドスミスもしくはサッカーの鼻などは構造の上から云うと随分申し分はございませぬが
その申し分のあるところに愛嬌がございます。鼻高きが故に貴からず、奇なるがために
たつと
貴しとはこの故でもございませぬか。下世話にも鼻より団子と申しますれば美的価値から
申しますとまず迷亭くらいのところが適当かと存じます」 寒月と主人は「フフフ」と笑い
だ
出す。

めいていじしん ゆかい わら
迷亭自身も愉快そうに笑う。「さてただ今まで弁じましたのは――」 「先生弁じましたは少
こうしゃくし げひん
し講釈師のようで下品ですから、よしていただきませぬ」と寒月君は先日の復讐をや
る。「さようしからば顔を洗って出直ませぬかな。――ええ――これから鼻と顔の権衡
いちごんろんきゅう おも た かんけい たんどく はなるん
に一言論及したいと思ひます。他に關係なく単独に鼻論をやりますと、かの御母堂などは
どこへ出しても恥ずかしからぬ鼻――鞍馬山で展覧会があつても恐らく一等賞だろろうと思わ
れるくらいな鼻を所有していらせられますが、悲しいかなあれは眼、口、その他の諸先生と
なんら そうだん できあが
何等の相談もなく出来上った鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したもの相違ご
ざいませぬ。しかしシーザーの鼻を鋏でちょん切つて、当家の猫の顔へ安置したらどんな者
でございませぬか。喩へにも猫の額と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳
えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据え付けたようなもので、少しく比例を失するの極、その
びてきかち おと こと
美的価値を落す事だろろうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそれのごとく、正しく英姿
さつそう りゅうき
颯爽たる隆起に相違ございませぬ。しかしその周囲を圍繞する顔面的条件は如何な者であ
りませぬ。無論当家の猫のごとく劣等ではない。しかし癩癩病みの御かめのごとく眉の根に
はちじ きざ ほそ つ あ じじつ しょうくん
八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるのは事実であります。諸君、この顔にしてこの鼻あ
りと嘆ぜざるを得んではありませぬか」 迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の

話しをしているんだよ。何てえ剛突く張だろう」と云う声が聞える。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。

迷亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたって、新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の深く名誉と思うところであります。ことに宛転たる嬌音をもって、乾燥なる講筵に一点の艶味を添えられたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する訳であります、これからは少々力学上の問題に立ち入りますので、勢御婦人方には御分りにくいかも知れません、どうか御辛防をお願いします」寒月君は力学と云う語を聞いてまたにやにやする。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツァイジングの黄金律を失っていると云う事なんで、それを厳格に力学上の公式から演繹して御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻の高さとします。αは鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりゃ困ったな。苦沙弥はとにかく、君は理学士だから分るだろうと思ったのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやった甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、——いいか両君能く聞き給え、これからの結論だぜ。——さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は無論の事許さねばなりません。またこの形体に追陪して起る心意的状況は、たとい後天性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなりません。従ってかくのごとく身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事と察せられます。

寒月君などは、まだ年が御若いから金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝は潜伏期の長いものでありますから、いつ何時気候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそれのごとく、咄嗟の間に膨脹するかも知れません、それ故にこの御婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になった方が安全かと思われ、これには当家の御主人は無論の事、そこに寝ておらるる猫又殿にも御異存は無

かろうと存じます」主人はようよう起き返って「そりゃ無論さ。あんなものの娘を誰が貰う
ものか。寒月君もらっちゃいかんよ」と大變熱心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を
表すためににやーにやーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ様子もなく
「先生方の御意向がそうなら、私 は断念してもいいんですが、もし当人がそれを気にして
病気にでもなったら罪ですから——」「ハハハハハ艶罪と云う訳だ」主人だけは大にむきにな
って「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌な者でないに極ってらあ。初めて人の
うちへ来ておれをやり込めに掛った奴だ。傲慢な奴だ」と独りでふんぷんする。するとまた
垣根のそばで三四人が「ワハハハハ」と云う声をする。一人が「高慢ちきな唐変木だ」と
云うと一人が「もっと大きな家へ這入りてえだろう」と云う。また一人が「御気の毒だが、い
くら威張ったって蔭弁慶だ」と大きな声をする。主人は椽側へ出て負けないような声で「や
かましい、何だわざわざそんな塀の下へ来て」と怒鳴る。「ワハハハハサヴェジ・チーだ、
サヴェジ・チーだ」と口々に罵る。主人は大に逆鱗の体で突然起ってステッキを持って、
往来へ飛び出す。迷亭は手を拍って「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐を擦って
にやにやする。吾輩は主人のあとを付けて垣の崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持
無沙汰にステッキを突いて立っている。人通りは一人もない、ちょっと狐に抓まれた体であ
る。